2000年12月1日

セミナー通信　Vol．80　西村セミナールーム
主宰　西村　和彦

国語の点をとるには　その2　表現する力

国語のテストは他の科目に比べて「文章」で答えることが多くなります。いわゆる記述問題ですが、これを不得意だという人は少なくないでしょう。しかし、「なぜ、苦手なのか」が本当に分かっている人は意外に少ないと思います。

もちろん、設問の意味がわからないケースや本文そのものが理解できていないケースは、「日本語を読む力」が不足しているためであって、その場合は記述問題以外でも数多く間違えますから、これから述べる対処法は効果がありません。

読めてはいるけど、答える技術が未熟であるために得点を落としている人は、以下の点に気をつけてみてください。

主語述語の対応がとれているか。

内容の要約や短文作文でもっとも気になるのは、この主述のくいちがいです。日本語の場合、主語を省略してもほとんどの場合通じてしまうのですが、試験の解答としては、主語があることが必要となります。さらに、主語にあう述語表現が採点基準となるのですが、ここに弱点をもつ人が多くいます。例えば「…であるためには、」という書き出しに対して、「～であることが必要である。」とくるべきところ、本文中の表現をそのまま書き抜いてしまい、違和感のある文章になったりするのです。

字数制限は大きなヒントです。

原則として、記述問題の場合、字数制限がある場合が多く、それがヒントになるケースがあります。原則として、字数制限目一杯か、せいぜい２文字程度の空きが答えになります。例えば、「十字以内」といわれたら、答えは必ず８～10字です。７文字以下であることはありません。「以内だから７文字でもいいじゃないか」という人は、作問者の意図を理解しているとはいえません。

また、本文の該当箇所を書き抜こうとすると字数をオーバーしてしまう場合、つまりいくらか語を削る必要があるのですが、何を削るべきかわかっていない人がいます。主語・述語・目的語など、文の骨格になる語はもちろん抜けません。つまり、主に過剰な修飾語（形容詞・副詞）や接続語を言い換えたりして（「しかし」を「が」にかえたり）不要な語を削って字数内におさめる技術が必要です。ただし、逆に「それ」「これ」などの指示語はそのまま使わず、具体的にさしているものを書く必要があります。

愛知県の公立入試では、国語で内容要約の設問が１問と理科に１問記述がありますが、これらはいずれも基本的なものです。それでも模試などで表現力の未熟な解答をよくみかけます。たかが２問ですので、捨てても高校に合格はできますが、文章表現力は、先々のことを考えると身につけて欲しい力のひとつです。